

2012年「オーディオ・ホームシアター展」より
迫力絶妙な45名のプラスバンドを
80名を超える参加者がデジタルレコーディング！
「音展の生録イベント」

録音機器・技術普及委員会主査
岩出 和美

1. 生録ワーキンググループについて

(一社)日本オーディオ協会には「録音機器・技術普及委員会」がある。商品ジャンルとして大きな存在になった、高品位 IC レコーダー、つまりハンディ PCM/DSD 録音機の普及浸透を促進し、録音再生という作業をオーディオにおける文化として定着させることを目的としたグループだ。構成は各録音機製造メーカーと一部出版社。

開催するイベントは主に、一般オーディオファンを対象にした「ライブレコーディング体験会」とセミナーである。2009年の「A&V フェスタ」から、昨年の「オーディオ・ホームシアター展 2012(音展)」まで計5回と、臨時の1回、計6回の「ライブレコーディング体験会」を開催している。

2. 音を録音するという文化推進

さていま、なぜ生録＝ライブレコーディングなのだろうか。オーディオの黎明期、高音質音楽ソースとして、あるいは高額であったレコードの代替メディアとしてオープンデッキの録音が、オーディオファンの間で盛んであった。そしてFM放送のエアチェックとしてカセットデッキでの録音が全盛を極めた時代もあった。また一方では、それらオープンやカセットの録音機のインフラを利用して、自然音や蒸気機関車、そして音楽録音をする生録ブームも起きたわけだ。もはや記憶の範疇だが、ロクハンとかサウンドボーイといった専門誌もいくつか登場した。もちろんブームを反映したレコードも多く発売されていた。野鳥、飛行機、自衛隊の演習、花火、日本各地の珍しい音、そして後に紹介する石田善之氏に代表される、蒸気機関車の録音が話題を集めた。スタジオを出ても、かなりの高音質で録音できる時代となったこと、そしてそれを再生する環境が整ったことを象徴することがらであった。ところがその後急速に生録ブームは衰退した。私見ではあるがCD登場によって、手軽によい音、豊富な音源が入手できるようになり、再生オーディオが主役となったためと思われる。

雑誌の取材で生録をしているとよく言われることがある。「いまは便利で安価なビデオムービーがあるではないか、画も音も結構良く録画録音できる」ということだ。確かにデジタルになりムービーの性能は格段に向上した。音もPCMが採用されはじめた。そしてかなり小型になっているので一理も二理もある。

しかし、である。音だけのソフトの存在価値は依然衰えていない。DVD、BDの世の中にあっ

て、CD/SACDは健在だし、FMやAMといったラジオは、このテレビ時代にあっても、ラジオの存在もあるにはせよ、再び盛り上がっている。やはりAとAVはきわめて近くありながら、意外と違うものなのではないか。楽しむTPOが違うとよく言われるが、実は感動のあり方や心への入り方の位相が全く違うものではないかと思う。私は音響の専門でも大脳生理学の専門でもない、ただの文化系編集者だけど、なぜかそこは確信している。それは実際に、インタビューや生録で録音した音を聞けば誰にでもわかるだろう。記憶と懐かしさ、生々しさが心にしみ込むからだ。

3. ハンディレコーダーの用途提案

最近のデジタル録音ブームはまさにデジタルの恩恵である。ハイレゾリューションは当たり前、DSD録音ができるものまである。しかもステレオマイクが付いてコンパクト。メディアはフラッシュメモリーで、録音できる時間はアナログ時代には想像できないくらい長時間が可能になっている。机2台分以上の装置だったデノンの初代PCM録音機や、高級アンプ1台分だった初のコンシューマー用プロセッサ、ソニーPCM-1(録音記録するには別のビデオデッキが必要だった)からすると、その進歩は隔世の感だ。

ハンディPCMレコーダーは、ローランドが、演奏家や、ライブ録音ファン向けに開発したのが最初。特にコンパクト低価格のR09の登場が火付け役になった。音楽練習用、インタビュー用、番組取材用、そしてライブ録音用として人気を集めたと同時に、各社がそれぞれの視点で、製品を投入するに至り、それまで会話録音用の中に位置づけられていたICレコーダーから別れ、一つのジャンルとして世の中に認識されるに至っている。第何次からかはわからないが新生録・レコーダーブームが到来したわけだ。

生録ワーキンググループでは、これらハンディ・デジタルレコーダーのさらなる認知と用途提案、そしてライブ録音において問題となる著作権の意識向上をテーマに活動している。2012年の活動としては、前述の音展での「ライブレコーディング体験会」があげられる。ここで概要をご報告しておこう。

4. 音展のイベントでは44名の豪華ブラスアンサンブルを録音

一般ユーザーを集めての体験会の録音対象はすべて音楽で、パーカッションとブラスのアンサンブル、アコースティックギターをベースにしたデュオ、セミビッグバンドジャズ、クラシック系のトリオなど、なるべく電気を使わないプログラムを選んで、しかも大切な思い出として残るようそれぞれ、一流の音楽家を登場させている。

そして昨年は6回目。演目は、ブラスアンサンブル=吹奏楽とした。中学、高校、大学と長い間、参加生徒、学生の多いジャンルである。練習にハンディレコーダーを使う機会も多く、しかも大勢のアンサンブルのため、録音の腕がものをいうという、ワーキンググループの判断であった。最初は学生のフレッシュな息吹をテーマとしたが、丁度全国大会のシーズンと重なり、プロアマ特別編成のワнтаイム吹奏楽団、「アトラクティブ・ウインド・オーケストラ」の録音とあいなった。この楽団は一流ミュージシャンが主導する、44名のブラスオーケストラ。バンドのマスターはトランペットの石井慎太郎氏、指揮者は中野和彦氏。そしてソロとしてクラリネットの益

田英生氏、チューバの本間雅智氏、トロンボーンの橋本勇太氏、サクスの塩川光二氏がフィーチャーされた豪華メンバーである。

演目はライトクラシックからラテン、ジャズまでをカバーする、プラスアンサンブルならではの多彩なもので、締めくくりは誰もが知っているディズニーメロディで、とても楽しいプログラムであった。そのビッグでゴージャス、しかも生ならではの精緻なアンサンブルをそれぞれ、小さな高性能 PCM レコーダーで録音体験できるわけで、こんなチャンスは滅多にはないだろう。

5. 多くの参加者が録音の醍醐味を楽しむ

体験会は「音展」開催期間中の 2012 年 10 月 21 日(日)に、2 回の公演が行われた。場所は富士ソフト 5F アキバホール。ワーキンググループの中の、デジタル録音機メーカー5社、オリンパス、コルグ、ズーム、ソニー、ティアックが協賛となり、参加者への実機の貸し出しと、簡単な録音方法のレクチャーを行っている。録音機の持参も OK である。参加料は基本無料であるが、JASRAC への登録料と録音メディア費が必要となる。これはリーガルなソフトを家庭に持ち帰るためには欠かせない事柄だろう。

イベントの講師と、ワーキンググループの記録録音を担当されたのが、レコードや CD、そしてオーディオ誌で生録を実践されている石田善之氏。当日は最低限のマイクスタンドと、B&K のペアマイク、そして TASCAM/DV-RA1000HD にて記録録音を行っている。また参加者に、最低限のプラス録音のこつとレベル調整をレクチャーしている。

結果として一日 2 回公演で、各回、40 名を超える参加者が、ハンディレコーダーを使っての、ライブレコーディングに挑戦した。また演奏自体のギャラリーも多く、それぞれプラスサウンドを十分に堪能したようだ。



石田善之氏



「アトラクティブ・ウインド・オーケストラ」